インパクト志向金融宣言

Japan Impact-driven Financing Initiative

第2回リアルギャザリング（旧ワーキングレベル会合）が開催されました

インパクト志向金融宣言では、これまで4半期に1度開催してきたワーキングレベル会合を改め、今年度から、署名機関間のディスカッションやネットワーキングの場として「リアルギャザリング」を開催しています。2026年10月23日（金）9：30～11：30に、第2回の会合がハイブリッド形式で開催され、オンライン・オフライン合わせて約70名が参加しました。



アジェンダ

■セッション1：新規署名機関/賛同機関/アドバイザー紹介

■セッション2：講演「AIとウェルビーイング」について
ゲストスピーカー：帝京大学　城戸 隆教授
ファシリテーター：事務局　田原

■セッション3：トピックス

- 人材育成研修の開始(GLIN)
- プログレスレポート報告(事務局)
- コンファレンス報告(事務局・分科会)
- サステナビリティ報告書 別冊「Impact Book」のご紹介(農林中金様)
- 欧州でビジネスを行なっている日系企業に対するESRS開示、特にインパクト
- 開示の適用に関する論点(国際監査・保証基準審議会(IAASB)ボードメンバ
- 一大野 美希子様)
- 会計報告

概要・主な意見交換

■ セッション1：新規署名機関/賛同機関/アドバイザー紹介
10月1日付で新規署名機関として参画した一般社団法人 ソーシャル・インベストメント・パートナーズ、および、賛同機関として新たに参画した一般社団法人インパクトマネジメント実践機構(AIIM)およびClimate Bond Initiativeから、それぞれご挨拶をいただきました。また、新たにアドバイザーに就任した小沼泰之氏からもご挨拶をいただきました。

■セッション2：講演「**AI**とウェルビーイング」について
帝京大学の城戸先生が「AIとウェルビーイング」をテーマに講演されました。先生はAI研究に30年以上携わり、遺伝子研究、スタートアップ、スタンフォードでの研究を経てこられました。その経験から、「AIは人間の鏡である」という立場を示されました。

AIは文明の分岐点をもたらしますが、繁栄に向かうか、人間の家畜化などの破滅に向かうかを決めるのは技術ではなく、人間の主体性だと指摘されました。そのうえで、人間がAIに合わせるのではなく、人間本来の可能性を引き出す「ウェルビーイングAI」を提唱されました。

さらに、スタンフォード近郊で続けてこられた国際シンポジウムの変遷、AI for Scienceとヒューマン・コンパティブルAIという二つの軸、計算資源や富の集中といったAIの影の側面にも触れられました。最後に金融に対し、人間の能力と選択肢を広げ、恩恵を分かち合う未来を支える役割を期待すると述べられました。

【ファシリテータからの質問】
Q：認知バイアスは、脳のメカニズム上どうして生じるのか？AIによってどう変わるか？
A：脳の構造は個人差があることが分かっているが、AIによって増幅される可能性が指摘されている。例えばAIからのリコメンデーションによりエコーチェンバー（Echo Chamber） が起こり、考え方が偏り多様性が失われる傾向があることが分かっている。2極化していくことが考えられる。

Q：これまで、多様性が推奨されてきたが、AIによって同質化する可能性があるか？
A：同質化しやすい土壌になるかもしれない。

Q：人間とAIが協働して新たな価値や発見を生む「ディスカバリー（創造的発見）」の領域で、最新の研究結果として分かっていることはあるか？
A：AIが自律的に課題処理を担い、科学革命や学術分野へ決定的な影響を及ぼすなど、人との協調による高度な創造的発見が加速度的に進展している。まさに検証中の段階。

【**VC**分科会からの質問】
Q：AI関連事業へ投資する際、人のウェルビーイングに与える「負の影響（ネガティブインパクト）」として特にどこに注意すべきか？技術の進歩が速すぎて2年後すら見通しにくい。
A：雇用やプライバシー等も重要だが、本質的には人間の主体性や自ら考え判断する能力が損なわれる「人間の家畜化」を強い問題意識を持っている。また短期・直接的には、AIをめぐる開発競争やパワーゲームによって本質や「ロマン」が失われる恐怖もある。

Q：人間の家畜化を避けたいと思ったときに、どういう判断基準で見ていくべきか。
A：提示された答えを鵜呑みにせず、「問う力」を養うことが重要。無意識の思い込みを自覚して外し、違和感を大切にしながら「吟味・検証・問い直す」サイクルを回すこと、そして「そもそも何を行う存在なのか」という本質的な問いを立て続ける姿勢が重要。

【会場・参加者からの質問】
Q：個人の意識だけでなく、社会システム・仕組みとしてAI時代をどうデザインすべきか？（シンガポールではJob Resigignが進んでいて職種は守れないけど雇用は守るという方針を国全体で進めている）
A：イノベーション推進と過度なリスク規制のバランスには難しさがある。研究者個人としてはルールを作りすぎない自由な環境を好むが、急激に進むAI技術に対して社会全体のガバナンスや仕組みをどう整えるかはとても重要かつ難解な問題。

Q：「問う力」など個人努力に委ねると格差が広がり、大多数の方々は家畜化が進むのではないか。企業や社会構造としてできる施策はあるか？
A：年齢や発達段階に応じた利用制限といったエビデンスに基づく判断ができればよいが、研究にはまだ時間がかかりそうである。直観的な判断も必要かもしれない。

Q：AIに思考や言葉を任せることで「家畜化」する世界は、ディストピア。そのような世界で言葉や人間らしさを保つにはどうすべきか？ヒューマニズム（人間らしさ）を突き詰めた結晶は何なのかを考えると、ことばではないか。ことばを取り上げてしまうと人間らしさではなくなる。人間が言葉を獲得し続け、豊かにし続けるには、AIをどのように活用すればよいか。

A:とても重要な問い。対話を通じて言葉を磨く可能性も模索しつつ、知らず知らずのうちに思考や言葉が奪われていく危険性を常に意識し続けることが防衛策になるかもしれない。

Q:科学的・論理的な強みを持っているのがAIだとすると、非言語、共感力、意志、信念など「AIがタッチできない領域」を人間が導くことで家畜化を防げるか？
A:意志や共感、価値観との整合(アライメント)の重要性に共感。AIは単純な論理演算ではなく多次元ベクトルの計算を行い、論理的とは必ずしも言えないプロセスで動いている。多様な人間の価値観とAIをいかに適合させるかというアラインメント問題は大きな課題。

Q:AIに対する規制について、ディスカバリー推進と家畜化防止のバランスをどう捉えるべきか？
A:個人的なスタンスとしては規則がないほうを好むが、答えのない哲学的・倫理的課題に直面した際は、確固たる信念(聖書の教えなど)を自分の規範として判断している。

Q:AIによる同質化の流れで、低確率な課題に挑む「ディスカバリー(ロマン)」が失われないか？短期間で結果が求められる世界にならないか。
A:ロマンが失われるのはEmpire of AI(覇権争い)の世界。Empireにならなければ、挑戦におけるロマンは残る。周囲から不可能と言われても、枠にはまらず「人のやらないことをやる」熱意と情熱が、今後も画期的な発見を生み出していくと思う。

■セッション3:トピックス
各トピックについて、以下のとおり情報共有・報告がありました。

- 人材育成研修の開始(GLIN Impact Consulting)
  研修の全体コンセプトは初学者向け。基礎編は10回シリーズでそれぞれ15分から30分の動画を11月以降配信していく。実践編は4つのアセットクラス別に準備しており、対面とオンラインのハイブリッドで90～120分のプログラム。IDFI署名機関が講師として登壇し、事例紹介とケーススタディを組み合わせた研修となる予定。

- プログレスレポート報告(事務局)
  インパクトファイナンス残高は、前回調査の17兆円から27兆円に増加し、特にレベル2の伸びが堅調で質・量ともに成長していることが分かった。集計プロセスについて、次回は自動化・効率化を進める。

- コンファレンス開催報告(事務局・分科会)
  多くの参加者が参加し、アンケート結果も高評価(平均推奨度4.36 / 5)であった。各セッションのテキストデータを限定公開中。

- サステナビリティ報告書 別冊「Impact Book」のご紹介(農林中金岡本様)
  初めてImpactという名前を付けたレポート「Impact book」を発表。インパクト創出の現場で何が起きているのかを伝えるために、現場での取り組みを紹介している。株式会社ではない農林中金ならではの価値創造の取り組み視点がユニーク。
  ※アンケート実施中:農林中央金庫　サステナビリティ報告書2026「Impact Book」に関するアンケート 。

- 欧州でビジネスを行なっている日系企業に対するESRS開示、特にインパクト開示の適用に関する論点(国際監査・保証基準審議会(IAASB)ボードメンバー大野 美希子様)
  国内ではSSBJによる有価証券報告書での開示推進が注目を集める一方、欧州のサステナビリティ報告基準「ESRS」におけるインパクト情報開示の動きが急速に拡大。欧州では2024年から約1万社で運用が開始されており、非EU企業向け基準(ESRS 40a条)の公開草案発表に伴い、日本企業も約100～150社が対象となると見込まれている。多くの日本企業がパブリックコメントやフィールドテストに参加するなど、規制面からの対応が始まっている。情報利用者である投資家がインパクト情報をどのように見ているかについての認知が不足している面があり、ぜひIDFIでも議論していきたい。

- 会計報告

資料のとおり。

今後のリアルイベント(旧 **WL**会合)

2027年1月22日（金）
2027年 4月22日(木)（仮、年次総会）

以上